

白雲片片

第十九回

岑大虫

今回は長沙景岑禪師、三聖慧然禪師、秀上座が登場する古則を紹介します。

正法眼蔵三百則 第二百三十四則

長沙の岑大虫、因みに三聖、会に在り、秀上座をして問わ教む、南泉、遷化して什麼の処に向かつてか去る。師云く、石頭、沙弥為りし時、六祖に参ず。

秀云く、石頭の六祖に参ぜしことを問

わず、南泉、遷化して甚麼の処に向か

つてか去る。師云く、伊をして尋思去せ

教む。秀云く、和尚、千尺の寒松有

りと雖も、且らく抽条の石笋無し。

師、默然たり。秀云く、師の答話を謝す。

師、亦た默然たり。秀、三聖に挙似す。

聖云く、若し実に与麼ならば、猶お臨濟

に勝ること七歩、然も是の如くなり

と雖も、我れの明日更に験過せんを待つ

べし。聖、自から方丈に上りて云く、

和尚、昨日の答話、光前絶後と謂う可し。

師、答えず。聖云く、我れ従来、這の

漢を疑著せり。

現代語訳／岑は長沙景岑禪師、聖は三聖慧然禪師、秀は秀上座。

中国の長沙という地域のお寺にいた長沙景岑禪師の話です。三聖慧然禪師が長沙景岑禪師のお寺にいた時、秀という名の上座に命じて長沙景岑禪師へ質問をさせました。

秀「和尚さんの本師である南泉普願禪師は遷化された後、どこへ行かれたのでしょうか」

岑「石頭希遷禪師は見習い僧の時に大鑑慧能禪師に弟子入りした」

秀「石頭希遷禪師が大鑑慧能禪師に弟子入りした時の話など聞いてはおりません。和尚さんの本師である南泉普願禪師は遷化された後、どこへ行かれたのでしょうか」

岑「大鑑慧能禪師は（遷化した後）石頭希遷禪師を青原行思禪師の弟子にさせた」

秀「和尚さんは千尺もある大きな松のよう

うに人を寄せ付けないほどの風格があるようですが、春になって小さな芽を出すタケノコのような温かみや

柔らかさというものがございませんね」

秀上座の言葉を聞いて、長沙景岑禪師は黙っていました。

秀「ご回答、ありがとうございます」
秀上座は三聖慧然禪師の所へ戻って長沙景岑禪師とのやりとりを報告しました。

聖「本当にそうならば、長沙景岑禪師は自分の本師である臨濟義玄禪師よりも随分優れていると言える。しかし、本当に優れているかどうか明日、自分自身で試してみよう」

三聖慧然禪師は次の日、住職の部屋に上がって長沙景岑禪師に言いました。
聖「和尚さんの昨日の答えは今までにもこれからもないと言えるほど素晴らしいものですよ」
しかし、長沙景岑禪師は何も言いませんでした。

聖「自分は以前から、この男は只者ではないと思っていた」

題名の岑大虫というのは「岑」という名の虎」という意味です。このようなあだ名が付いたのも、長沙景岑禪師は弟子に対して大変厳しかったらしく、弟子以外

の僧侶に対しても自分の境地を表現するために乱暴とも言える方法をとることがあったためだそうです。

秀上座の質問は「遷化したあなたの師匠はどこへ行ったか(南泉普願禪師はどこへ教化を遷したか)という空想的なものです。恐らく、三聖慧然禪師はそれを十分分かった上で、わざと秀上座にこのような質問をさせたのだと思います。それに対し、長沙景岑禪師の答えは、「石頭希遷禪師は見習い僧の時に六祖に弟子入りした、六祖が遷化した後に石頭希遷禪師は青原行思禪師の所へ行って修行した」という具体的な事柄を述べておられます。現実に即して行動している長沙景岑禪師は、遷化した本師がどこへ行ったかという質問には直接答えず、(質問とは違う話ではあるけれども)本師が遷化した後の自分は、六祖が遷化した後

に、青原行思禪師の所へ行って修行に励んだ石頭希遷禪師と同じだ、という意味でこう答えたという事です。

長沙景岑禪師は乱暴者という意味で岑大虫という名が付いている方ではありませんが、この古則ではその名に相応しくなく、黙るという方法で自らの境地を表現されていますから、もしかするとお歳を召された頃の話かもしれません(生没年不詳ですが、法系図を見る限り長沙景岑禪師は三聖慧然禪師よりもだいぶ歳が上ではないかと思われまます)。

古則というのは短い文章ですが、お姿は見えずとも、仏道に対し真剣な祖師の情熱や、仏道と一言で表せるにせよ、祖師によって違いがあるいろいろな性格が滲み出て来るような気が致します。参考文献／西嶋和夫著「真字正法眼蔵提唱下巻一」、駒沢大学編「禅学大辞典」

